

まちとデザインをつなぐ試み

フリーライター 湯浅 玲子



1996年は福岡市で、まち並み、アート、デザインなどに関する多彩なイベントがおこなわれた1年だった。それだけさまざまな分野で都市やデザインに対する興味が高まってきた証拠といえるかもしれない。今回は3つの事例を振り返りながら、その試みの意味を探ってみよう。

建築設計教育の刷新を目指して

福岡学生デザインレビュー'95-'96

3月9・10日の2日間にわたって、アクロス福岡でおこなわれた「福岡学生デザインレビュー'95-'96」は、学生の作品を題材にプロの建築家たち（ジュリー・陪審員）が議論をおこなうという、日本では珍しい討論形式のイベントであった。1日目は学生たちの作品を各ジュリーが審査し、翌日のプレゼンテーションのために8作品を選ぶ。参加者は自分の作品をジュリーにアピールすることができたため、会場のあちこちで熱心な意見交換がおこなわれた。2日目は学生の作品説明の後、擁護役のジュリーふたりが解説し、さらにそれを他のジュリーが批評する形をとった。

これは行政などが主催したものではなく、大



1. 公開審査で選ばれた学生たちとジュリーの方々
2, 3. プレゼンテーション風景 4. 白熱した初日の審査風景 5. 「ミコストリウム・ウルガリスの家」ニシイススム（九州大学4年） 6. 「Temporary Housing in Community Space」内田貴久（岡山大学修士2年） 7. 「Water Network」田中真之（九州芸術工科大学4年） 8. 「The Role of Intermediary」岡本裕司（同大学4年）

学で建築教育をおこなう者、実社会での建築関係者などが中心になって実現した自主的なイベントである。その背景には今日の大学建築教育に対する大きな危機感がある。これまで日本の多くの大学では技術者教育に重きが置かれ、建築や都市計画をおこなう際に重要なデザイン感覚、生活感覚、いわゆるソフト力がおろそかにされてきた。そのため、すでに大学教育より現実社会の方が数段先を行っているともいえる。加えて建築教育をおこなう大学自体が少ない地方では、大学相互の交流も少なく、限られた教官・学生での活動に終始しがちだ。

こうした現状を打破するため、学生が第一線の建築家たちに触れて刺激され、さらに大学相互間の交流をめざしたのが今回のイベントである。そのため、ジュリーには国内外で活躍するそうそうたるメンバーが集まった。また作品の選定に関しては完成度の高さより議論としての発展性があるかどうかを基準となり、架空の生物を主役とした住宅設計まで登場した。参加したジュリー・学生とも総じて反応は好評であり、「意義ある活動」「面白く勉強になった」という声が高かった。

一方で、いくつかの問題点もある。まず広報の不足もあり、参加者は一部の熱心な学生にと

どまった。またプレゼンテーションには選ばれなかった学生が2日目には参加せず、初日はそれほど盛り上がりがあった熱気が、肝心の2日目まで持続しなかった。このため1997年3月に予定されている第2回では、公開審査とプレゼンテーションを同日におこない、より広い範囲からの参加者を募るため応募資格を九州全域に拡大した。

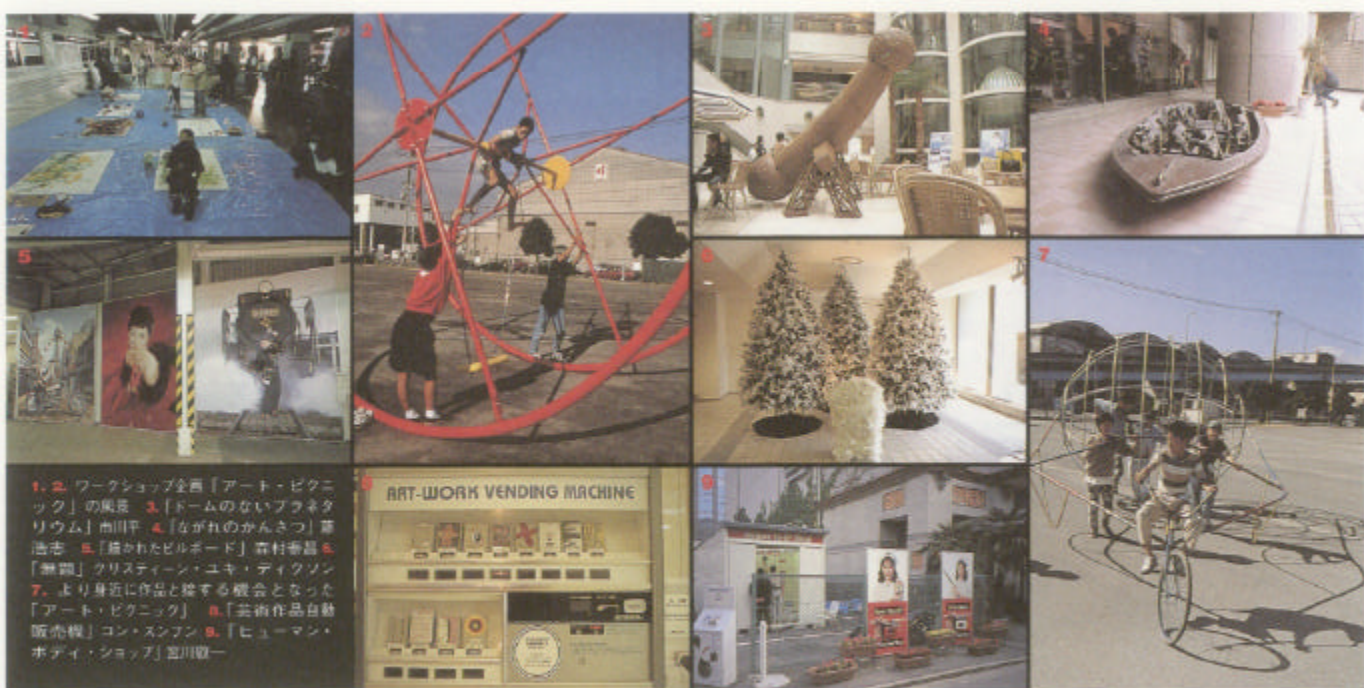
この試みは決して「学生の作品」を考慮するだけのものではない。それをツールとしながら、大学の建築教育、さらに現代建築や都市について考え、議論をする場である。そして日本、特に九州などの地方都市では、いかに教育や建築、都市について議論する場が不足していたか、ということの証明でもある。

都市の文化度を試すアートイベント

ミュージアム・シティ・天神1996

「ミュージアム・シティ・天神」は福岡市内の公共の場所や商業スペースに美術作品を展示する美術展で、1990年から2年に一度おこなわれている。1996年も10月の1カ月間、国内外のアーティスト10組の作品が福岡市天神周辺に展示された。いわゆる「街の中のアート」や「パブリックアート」などといわれるものの先駆的試みであり、その活動は全国から注目を集めている。

今回の「ミュージアム・シティ・天神」にはいくつかの特色がある。まず展示場所を天神周辺に限定したこと。これまでは作品や作家の特性を考え、郊外あるいは福岡市内でも中心部をはずれた場所が多かった。今回は設置を天神周辺に限定し、その意味では初期のコンセプトに最も近い形になったといえる。より多くの人々の興味をひくことができ、作品と観客との



1, 2. ワークショップ企画「アート・ピクニック」の風景 3. 「ドームのないプラネタリウム」出陣 4. 「ながれのかんさつ」藤浩志 5. 「揺れたビルボード」森村泰昌 6. 「無題」クリスティーン・ユキ・ディクソン 7. より身近に作品と接する機会となった「アート・ピクニック」 8. 「芸術作品自動販売機」コン・スンファン 9. 「ヒーローマン・ホディ・ショップ」並川一

子期せぬ交流も生まれた。アートの自動販売機などは、都市中心部に設置された効果的な見本であろう。

反面、いくつかの制約も生まれた。作品が比較的小粒になり、巨大な作品展示が少なかったこと。また野外展示が少なかったこと。これは次回への課題といえる。

もうひとつの特色は、伝達・普及に関する活動を重視したことである。従来の案内マップなどに加え、作品解説や作家紹介をつけたミニカタログを作品そばに設置。さらに数カ所の展示会場には解説員を置いて、観客への作品解説をおこなった。近年、難解になりがちな美術作品を分かりやすく解説し、アートと見る人をつなぐ「アウトリーチ」と呼ばれる動きがある。今回はアウトリーチ活動を支援する「ドキュメント2000プロジェクト」から助成金を受け、ミニカタログなどの製作をおこなった。

また、1995年に始まったワークショップ企画「アート・ピクニック」を事業の一環として位置づけた。アーティストがクラスを持ち、一般市民が参加するこのワークショップには、2日間で前年度の2倍以上、延べ450名が参加。大変な盛況であった。

総じて今回は分かりやすさ、親しみやすさが重視され、より一般市民に近づいた内容になったといえる。もちろん、すべてが成功したわけではないが、「活動そのものがアウトリーチだ」という評が示す通り、このアートイベントが続いている意味は大きい。

天神という巨大なエネルギーの中で、あえてアートを展開する意味について山野真悟事務局長はこう語る。「まさに余裕があればアートのような遊びも受け入れられる。言い換えれば、天神がそんな余裕のないまちにはなっていない」。その言葉は、アートの社会での役割を適確に表現している。

試行するまちづくりのキーワード
パブリックアート・フォーラム
第3回全国シンポジウム・福岡

「ミュージアム・シティ・天神」期間中には、さまざまな企画展やアートにまつわるシンポジウムなどが開催され、福岡はアートのイベントが集中する地方都市として話題になった。10月4・5日におこなわれた「パブリックアート・フォーラム全国シンポジウム」もそのひとつだ。これは、東京に事務局を置くパブリックアート・フォーラムが、毎年各地の自治体と協力して開催しているものである。3回目となった今回は、福岡市都市景観条例制定10周年記念事業として福岡で開催された。

「都市の中のアート」と市民との対話の可能性」を全体テーマに、「生きたまちにおける生きた芸術」の実現に向けた、特に市民参加の在り方が課題とされた。また、「ミュージアム・シティ・天神」に代表されるような、まちの中に一時的に置かれるパブリックアートの可能性も話題の中心となった。初日は基調講演、福岡の現状をテーマとした報告と討論会がおこなわれ、2日目は4つの分科会に分かれての意見交換の後、総括討論がおこなわれた。このほか開催中の「ミュージアム・シティ・天神」や福岡市内のパブリックアートを見学するツアーも組まれ、全国の自治体関係者や美術関係者を中心に多数の参加があった。

また今回新たに、市民が気軽に参加できる無料の企画として、「彫刻のあるまちウオッチング&市民フォーラム」が併催された。まちの彫刻について感じることや彫刻のあるまちづくりの在り方、市民参加の方法などについて、熱心な意見交換がおこなわれた。告知不足もあり多くの市民が参加したとはいえないが、熱意ある市民の議論はこのような場の重要性をあらため



1, 3, 5, 7, 市民フォーラム「パブリックアートと対話するまちづくり」の風景。2, 報告「ミュージアム・シティ・天神の試み—パブリックアートの可能性」。4, 討論「市民と対話するパブリックアート」。6, 10, 彫刻のあるまちウオッチング。8, 11, 基調講演「都市アートに出会うとき」藤森照信 東京大学教授。9, 報告「福岡市彫刻のあるまちづくり—その課題と展望」。

て認識させる機会となった。

福岡市では1983年より「彫刻のあるまちづくり」を展開しているが、まだまだ市民の認知度は低い。市がめざしているのは、彫刻のあるまちそれ自体というよりはむしろ、彫刻を通じて市民がよりよい都市空間を考え、育んでいくまちである。めざすべき文化的な都市空間の創造には、市民の意識が不可欠である。前記ふたつのイベントと違い、福岡での継続性がないだけに、このイベントの成果を今後のまちづくりに反映させること、またより多くの市民参加の機会が今後展開されることが求められている。

まとめ3つの事例を通じて

さまざまな分野で意識をもった人々が出現し、それぞれのアプローチで自主的にイベントを展開していることが印象に残った。教育関係者、建築関係者、美術家、行政など、立場や仕事は違っても、よりよい都市、人間にとって住みやすい都市をつくらうとする意識は同じである。どの事例においても、これまで切り捨てられがちだった部分に焦点を当てていることが象徴的である。

そして、現在は点と点の活動であるこうした試みが、さまざまな枠組みを越えて線と線、面と面になっていくことを期待したい。実際に「ミュージアム・シティ・天神」開催中に数々の相互協力事業がおこなわれるなど、その動きは広まっている。

さらに、そこには市民が参加できる場が必要である。市民参加には専門家とのレベルや意識の違いなど、さまざまな問題もある。しかし、そこに住む市民抜きにはまちづくり、まちのデザインは考えられない。市民参加できる場とともに、市民を巻き込むより高次元な工夫が求められている時代でもある。■